

K 209.5
デワ
7

出羽太平記  
七



出羽大平記卷之七

目録

義光公在楯形宿首實檢之事  
附 上吉田主水首之事

下江部宿降年之事

尾浦城合戦之事 附 下江部宿降年陳

之事



陸天童原馬場

修理多義康公の書

義光公正遊

或同

K209.5  
10  
7



義光公在福前極首受授  
伯上白糸多首

同日又日首實檢河

秋場

報兵

大將

其後

の世

たて身が  
三島 賢子 白屋 中 新巻 一 ぬしの鹿  
と持てしめし 首領 賢子の 陽新 賢子 押の陽の  
のう中 一 賢子 賢子の 賢子の 賢子の 賢子の  
と定ぬ 義光 公 福高 賢子 賢子の 賢子の 賢子の  
軍と 賢子 賢子の 賢子の 賢子の 賢子の 賢子の  
三百 騎 賢子の 賢子の 賢子の 賢子の 賢子の 賢子の  
左口 賢子の 賢子の 賢子の 賢子の 賢子の 賢子の  
介 賢子の 賢子の 賢子の 賢子の 賢子の 賢子の

と固  
の 賢子の 賢子の 賢子の 賢子の 賢子の 賢子の  
とあ 賢子の 賢子の 賢子の 賢子の 賢子の 賢子の  
なれ 賢子の 賢子の 賢子の 賢子の 賢子の 賢子の  
賢子 賢子の 賢子の 賢子の 賢子の 賢子の  
年の 賢子の 賢子の 賢子の 賢子の 賢子の 賢子の  
と用 賢子の 賢子の 賢子の 賢子の 賢子の 賢子の  
賢子 賢子の 賢子の 賢子の 賢子の 賢子の

ひまわり

白檀孔紅のちりしむら

白練る人のちりしむら

小鷹の山鳥のねり制

弓毛申梅電

胃ぬぬ

喰は放

と侍

日な

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

光公の右に膝を打ち首を修むるを  
何大爺官五層の三が梅禮の本四官八  
寸の板を削り鷹を丸め程釘を裏より差  
お貫て首の指一首の面をむくし  
首の両身の穴に糸を大指を正し  
指をく板を抱て大將の体を一丈四尺  
南に持をへちむけ膝をつくし  
何多子洋心等々山鳥の尻を大將

と張人との男を一丈有るを正し  
大將も太刀の柄を多きを修むる  
出に右の足と左の足の上を修め  
願一皮を白紙に斗をて麻を縫まひ  
長付大爺官五層の三が梅禮の本四官八  
寸の板を削り鷹を丸め程釘を裏より差  
お貫て首の指一首の面をむくし  
首の両身の穴に糸を大指を正し  
指をく板を抱て大將の体を一丈四尺  
南に持をへちむけ膝をつくし  
何多子洋心等々山鳥の尻を大將

三度まじりて入るも或人虎籠尾を拵む  
大将直取上四ツ名石のち哉とて中  
ツ合と十六度追加あり者よ凡水勝  
よりとふを存る石子彈心と稱うとて能く  
後人此等と稱する者曰くこれ勝凱歌  
と云ふなを上げると其後軍務も首  
むしり導きとて又大ね別と新  
め置者上げられど大将と並とるあま

三度修け佐も戦名守秀國と置物  
勝凱歌一と作らる然るに上山より首  
送りとて甲斐越後等が佐と伊良子深  
向とヤとるを名は首元持系は中と上  
泉を水振野は七布村造酒と並等ら  
首と山云へるは首元持と云ふと  
述べらる伊良子深等とて首元  
と云ふとては畏れとて首元と云ふ

ふり見るとこれに徳村遠圃とあるが首板活字書  
行及上皇を水首金原土佐討伐なりと書  
たり首桶の蓋にあり一見之とて下の蓋  
て傍にまらぬが実按の時日は徳村遠  
圃と申振世活字部あり首と申すれども  
上皇とあるが自ら具傳とて実按より  
出さざらんば越前守が何れを以て伊良  
子深心討てしやとて何れとては首に

實按より傳とせしむらばとて守らねど  
伊良子深心ありとてとて丸板の首に  
野ふのそととて大將の實按は出さぬ  
そのやとて上板の首とて流石なる  
侍らればは首とてとてとてとてとて  
自ら具首とてとてとてとてとてとて  
徳和守が何れを以て首とてとてとて  
蓋とてとてとてとてとてとてとて



十日入りし如くをいも色も落し目口如  
き荒雨と云くは如影もさくゆと云ぬ  
らうりも越守の侍もさわかん。人  
まはくもとりも肝の清くはらぬ  
そのも無らん侍の侍宗牛。はら  
いむりし侍も何んも平とんは家物も  
相馬小倉長下徳田の内裏もさく  
平親王将門と号し一國八州とび  
いんり

らるる平の貞盛ち父の部もさく  
奏し下徳と下り依藤と秀郷とん  
合付るもまねとのやせも将門  
物しんもさく自れもさく  
存し侍もさく家物もさく  
鉄んと侍もさく  
ある人をも聞  
将門もさく

信長は奇を以てしつゝ

は首は奇を以てしつゝ

用く私に中はそこの納言信四郎

首たぬをいふに

信頼と下建ち源義朝母をぬ

ゆひしむ河内守と母年の別のは

しつゝ俄に日とれと星出

信長義朝ゆひの

面しつゝ又えの目申

も義朝も果て保元平治の乱

けしつゝ今又近は

後倉薬師堂の谷古の

ゆひしつゝ馬に直義

相摸次第時行

孫人君と改入

軍の官が



くればはまはらりてきまらんもあはれ  
き後こく思おもひられぬまじりやおお倒たふ  
起おきよあがんと仕しまいらるや何れも何ならずは  
胸むねのよきまあらうへ腰こし口くちをねはら首くびは  
捲くんとらるは首口くちをねはら首くびは  
陰かげ加かへせ行いかる者ものはあらう也なり者ものは  
口くちをねはら首くびは首口くちをねはら首くびは  
一寸いち寸すんおきらるは首口くちをねはら首くびは

指ゆびをねはら首くびは首口くちをねはら首くびは  
此これが少すくないともあらうへ腰こし口くちをねはら首くびは  
西にしは首口くちをねはら首くびは首口くちをねはら首くびは  
首くびをねはら首くびは首口くちをねはら首くびは  
切きらんと首くび口くちの中なかにあらうは首口くちをねはら首くびは  
あらうへ腰こし口くちをねはら首くびは首口くちをねはら首くびは  
アアらうは首口くちをねはら首くびは首口くちをねはら首くびは

了せぬまゝに侍も教の如く投  
捨し物も一任留置るがごとく  
言一國は東の代は建王とし  
氏を以て天下を兼得んを以て國  
習いんとて初をおいする年久し  
河建王の夫人族の種を以て  
あひしるが如く侍も一任留置る  
懐妊し給ひ十月を以て法を  
たらしめ

席を以て一ツの種を以て  
楚を以て一任留置るがごとく  
金族の精靈を以て一任留置る  
は後を以て一任留置るがごとく  
作し給ひ侍も一任留置るが  
は後を以て一任留置るがごとく  
中にも侍も一任留置るがごとく  
侍も一任留置るがごとく

楚王とては二の劍精靈ありんが  
怨歎とて七とて思ふ今懐妊を産  
子とて産く勇ありんが一の劍を  
楚王とては二の劍を隠し  
まふとて興ありんが一の劍を干将の莫  
邪とて自ら産く楚王とて楚とて雌  
狐とて自ら産く胎ありんが一の劍を

隠しとて自ら産く楚王とて楚とて雌  
狐とて自ら産く胎ありんが一の劍を  
まれとては二の劍箱の中とて悲泣  
の声をよす楚王ありんが一の劍を  
啼みたりんが一の劍箱の中とて悲泣  
雌雄の二つありんが一の劍箱の中と  
て悲泣ありんが一の劍箱の中と  
楚王とて自ら産く胎ありんが一の劍を

のちの作せし首切られたるも後  
莫耶子ゆ座の面尋たの人と習  
長き一丈大司い百人かひあり  
面三人者眉を一人者られば世の人  
眉見人といふは年一十の  
何人か書きしは信を因て

日出北戸南山其松松生於

石 釵百其中

と書くは北戸の程の甲あり  
とねて根を剖りて見ると果一ツの奴  
あり眉有る人その得るは楚王の  
討もまた人の仇報をわたりし  
る骨體はむすし楚王は眉有る人が憤りか  
りてひくくをさしりて人をさすなり  
とあつたれば其六部官の宿軍とま  
眉有る人をせめしは眉有る人

かき書の上は侍と云ふは雄胆の又と能く  
死するもその歳子もさうかおやあはれ  
もさうか父干将が和音もさうか  
母も眉間人へ向くもさうか  
父干将と交うをさうか  
さうかも具朋友の恩を  
さうかも楚王と付合もさうか  
報せんともさうか  
さうかも楚王と付合もさうか  
報せんともさうか

喰切は口の中へ合んご可死を  
か首をぬく楚王一殺せば  
女の首切つてあらん  
先を楚王にゆけ  
さうかも楚王と付合もさうか  
切らん三寸喰切は口の中へ  
おのきも首を切切は容の  
さうかも容も眉間人へ首を



一奉ら建王夫とよりんが獄門に獄れ  
ふふふ二月近具首欄を以て目とるん  
齒を管一なるを遠うははとる建王  
そやめをわくぬ敷く近行ありふふふ  
鼎の中へ入ると七日夜がる煮る  
ありふふふははは首少欄  
て目と同ふふふ命を子細あはは  
建王ふふふ鼎の蓋をあけふふふ

付くは首命を切ふあやふふ建王  
首の骨を切りて首をちるふふ  
の中へふふ建王の首と眉から首と  
煮るあはは湯の中へ入ると煮る  
命を管一なるを遠うははとる建王  
そやめをわくぬ敷く近行ありふふ  
鼎の中へ入ると七日夜がる煮る  
ありふふふははは首少欄  
て目と同ふふふ命を子細あはは  
建王ふふふ鼎の蓋をあけふふふ



と信自より蔵院いのみが岩所へおゆ  
壇をうへて一七日修せられたるに三日目より  
毛かきつ夢しと七日と中隔りとの自  
目と果れたる一と行蔵院急に堂成  
しく始ゆがよとれは義光公斜に信自  
のひ信より自よりゆとゆとゆとゆと  
りんば行蔵院界りとの自の事と信自  
よりしく討つたると信自の事と信自

うとく討つと信自権現の社の下埋り  
りよりゆとゆとゆとゆとゆとゆと  
出業しとゆとゆとゆとゆとゆとゆと  
長谷堂  
の成と信自ゆとゆとゆとゆとゆと  
信自馬をゆとゆとゆとゆとゆとゆと  
付のゆとゆとゆとゆとゆとゆと  
るゆとゆとゆとゆとゆとゆと

員い一い百ももと續つ々つと攻くめ誠まこと意いを以もつて  
里見氏初はつに補たぎ同どう主しゅ計けいを始はじめしてと語かたり  
以もつて方かたくも金かね中ちゆう七しち龍りゆうを討うちぬぐを以もつて  
名な也やと云いふは如ごとくも一いっ條じょう山さんにて師しをあり  
以もつて以もつて志しと以もつて如ごとくも一いっ條じょう山さんにて師しをあり  
今いま是こゝにて其その後ごにて忠ちゆう信しんの道にて石いしの社にて寄より  
進しんめられるはは行ぎやう藏ざう院いんを若衆しゆう下げの天  
命みこと有あらはまる左ひだり國くに主ぬしの大事だいじにてははちた一いっ方

を預あづかりるにていふるはならばはあらはまるはさだめにて

### 志し前まへ志し降くだるる

同日二日ふたひの奉明めいといふは休やすみといふは馬うまをひき  
若わかさるちと上あげる侍さむらい志し前まへ志し降くだるる也なりと  
一いっ日いちにちの由にて出で陣ちんの退散たいさんといふは大だいにて原はら  
て谷や地ぢの御守ごまもりと右みぎ城しろの有りと左ひだり入いれ備び也なり  
2020

... 義光公 やひ

... おお

... 治

... 身と

... 田川郡

... 味方

... 治の

... 志村

...

...

...

... 田

... 卒

... 陣

... 卷

... 攻

... 景

... 一

... 退

七倉澤より管見するなり一町の山城を築き  
 を集めしむしむ一むらを築きはねを築きぬ  
 一むらにはるを人義を築き一高城を討  
 死一むらも四景勝云のむらを築きぬ  
 侍を相互あひあひのむらを築き一むらあり  
 是を中送のむらに理を築き一むらを築きぬ  
 降系お築き一むらに中送のむらを築き  
 中とるむらにのむらを築き一むらを築きぬ

治を築き一むらを築き一むらを築きぬ  
 めを築き一むらを築き一むらを築きぬ  
 お築き一むらを築き一むらを築きぬ  
 一むらを築き一むらを築き一むらを築きぬ  
 の一むらを築き一むらを築き一むらを築きぬ  
 世を築き一むらを築き一むらを築きぬ  
 一むらを築き一むらを築き一むらを築きぬ  
 一むらを築き一むらを築き一むらを築きぬ  
 一むらを築き一むらを築き一むらを築きぬ

信ひて正法を以てはるゝと多き自のたも  
しなく利へ欲あはく捨をりふくをを根  
ちを西征伊をちがうと送り一辭に信を  
はる義光公へ捨あはくちを成願と結  
り恩賞と報はる一志うは耐を平あが  
一門の常花園ありあは義と國あり  
然るに一人は情ありてを我とほも  
聖んどもをさうと道理を辨へたりと歎

五と捨をりあはくとの言を命を捨と  
有るにうはる何の道なりんか人ハ何  
とある果はあはくを自らを後と捨を  
捨るも一とあはくをさうとあはく思は  
りてやと捨をりあはくを中とあはくあ  
地御と國と伴御寤と聖物と博と  
とととと降系とととと伊是守斜と  
信ひて正法を以てはるゝと多き自のたも

下野郡戸井半尾の原(半尾)井上  
 其の由(由)宗統むねむねの一筋ひとぢ六七人(六)を(七)上(下)  
 六百(百)余騎(騎)の(騎)下(下)兵(兵)卒(卒)を(百)員ひやくゑん一(一)山(山)形(形)  
 一(一)上(上)下(下)兵(兵)卒(卒)と(治)治(治)等(等)初(初)門(門)々  
 者(者)在(在)田(田)部(部)百(百)首(首)其(其)姓(姓)名(名)在(在)田(田)を(を)名(名)る(る)  
 百(百)首(首)と(と)事(事)内(内)に(に)一(一)先(先)生(生)を(を)年(年)々(々)と(と)事(事)  
 名(名)知(知)む(む)所(所)り(り)の(の)事(事)を(を)田(田)部(部)の(の)一(一)部(部)知(知)  
 事(事)の(の)由(由)上(上)下(下)兵(兵)卒(卒)の(の)事(事)を(を)名(名)る(る)事(事)

事(事)は(は)田(田)部(部)一(一)と(と)有(有)り(り)と(と)一(一)部(部)名(名)は(は)後(後)に(に)  
 一(一)部(部)名(名)は(は)後(後)に(に)一(一)部(部)名(名)は(は)後(後)に(に)

庄田尾浦の城責の事

去(去)る(る)所(所)に(に)三(三)男(男)大(大)藏(藏)大(大)藏(藏)大(大)藏(藏)大(大)藏(藏)大(大)藏(藏)  
 頼(頼)宗(宗)奉(奉)去(去)る(る)所(所)に(に)三(三)男(男)大(大)藏(藏)大(大)藏(藏)大(大)藏(藏)大(大)藏(藏)大(大)藏(藏)  
 山(山)部(部)名(名)は(は)後(後)に(に)一(一)部(部)名(名)は(は)後(後)に(に)



有世首を 家康公は甲上大田越と云

大坂より下へ一をいひ一は度の大將

と云ふい酒田の城を攻んと云三田重清也

大將が文相たていらい甲斐守を大將と定まら向

らる本城豊和守佐本城を日蓮社也

志村宮内しむらみやういが補松浦領を志村守

之軍奉行と定相付く侍といふ南大坂の

下治屋の里見源兵衛が度越後守を和と

一は後守豊後五千余騎同月廿七日山形

より五月山の峯に城持川を渡り酒田

を攻め酒田の城を押しとるをいふ

酒田の城を攻め上は攻めより川村無我志田

修理しゆりを代へて徳をいふ山形城の

ひりふをいふ二人の郡代城をいふ上

川を攻め南へ陣を互ら陸奥の美濃守

松川を渡り射をいふと信をいふ

山形のそと河原におぼろげと遊んで  
とれどもはらへてきたる家へ酒田の藩士  
はと願ふ所のしつこくを容れぬ  
白鳥きく島へ下りて川下八幡と  
あるち海へ船を向ふと鎌倉  
こころはなほきくおけりて  
後舟の来りて十下りて川下  
船十人の艘借りて今度家上りの先

陳多下流有處と云ふ事と海にむく  
海へ舟を流すは月よりせむ馬と  
のむせとておそくおそく大刀を  
りておめりてんてりおとせり  
とあるはらへてきたる家へ酒田の藩士  
はと願ふ所のしつこくを容れぬ  
白鳥きく島へ下りて川下八幡と  
あるち海へ船を向ふと鎌倉  
こころはなほきくおけりて  
後舟の来りて十下りて川下  
船十人の艘借りて今度家上りの先



舟とてまゝに下りて進め下船南の川  
カレドと余入まじは海人の家徳のりく  
王座をよこす入く流るるに大將有  
藤吉もまた吉原に下知く魔指し何  
しも余何れも怪家の水の水の流  
乱れおとす大徳のりくも難  
ぬれ運利ありは若石ありて  
川中をさうに下りてのりく

右石橋田箱のぬれり流るひく  
弱き馬に下りて下り流る川よ  
ぬれ切るとは流るるのりく  
ありてよ流るる矢を射るる  
くしけよ余天変射るる吉原  
カレドと余入まじは海人の家  
ありてよ流るる魔指し  
下知ぬれり流るる

河を渡る一騎の別をたてぬるはあ  
と申す事跡の貴く一なる水に形ひ  
りぬれば一とまき一とまき一とまき  
川下を河原の一とまき一とまき  
岸の上を等しく一とまき一とまき  
の矢をたてぬるはあ一とまき一とまき  
長をば一とまき一とまき一とまき  
少なるも一とまき一とまき一とまき

川退く下治をたて一とまき一とまき  
追うも百十騎討た大将の毎に  
大なるも一とまき一とまき一とまき  
くは攻むるも一とまき一とまき一とまき  
幸ひと一とまき一とまき一とまき  
教おほく一とまき一とまき一とまき  
出づるも一とまき一とまき一とまき  
城中に近づくも一とまき一とまき一とまき

を自らし仰らん<sup>せん</sup>と遠く<sup>と</sup>致ひらん<sup>ん</sup>を容易<sup>たやす</sup>く致  
しむるは<sup>は</sup>なる<sup>なる</sup>と一<sup>一</sup>をよ<sup>よ</sup>く考<sup>考</sup>す<sup>す</sup>の<sup>の</sup>日<sup>日</sup>異<sup>異</sup>日<sup>日</sup>傳<sup>傳</sup>是  
い<sup>い</sup>如<sup>如</sup>く<sup>く</sup>神<sup>神</sup>敏<sup>敏</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>せん<sup>せん</sup>致<sup>致</sup>せ<sup>せ</sup>し<sup>し</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>て<sup>て</sup>軍<sup>軍</sup>督<sup>督</sup>ふ  
抽<sup>ひ</sup>き<sup>き</sup>傳<sup>傳</sup>へ<sup>へ</sup>る<sup>る</sup>と<sup>と</sup>武<sup>武</sup>系<sup>系</sup>入<sup>入</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>所<sup>所</sup>行<sup>行</sup>成  
大<sup>大</sup>多<sup>多</sup>の<sup>の</sup>櫓<sup>櫓</sup>より<sup>より</sup>付<sup>付</sup>添<sup>添</sup>抱<sup>抱</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>妻<sup>妻</sup>牛<sup>牛</sup>の<sup>の</sup>存<sup>存</sup>先  
より<sup>より</sup>ち<sup>ち</sup>の<sup>の</sup>根<sup>根</sup>の<sup>の</sup>下<sup>下</sup>へ<sup>へ</sup>お<sup>お</sup>曾<sup>曾</sup>ら<sup>ら</sup>九<sup>九</sup>真<sup>真</sup>逆<sup>逆</sup>の<sup>の</sup>爲<sup>爲</sup>と  
死<sup>死</sup>に<sup>に</sup>たり<sup>り</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>ん<sup>ん</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>ん<sup>ん</sup>守<sup>守</sup>り<sup>り</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ん<sup>ん</sup>傳<sup>傳</sup>た<sup>た</sup>あ<sup>あ</sup>  
付<sup>付</sup>せ<sup>せ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>を<sup>を</sup>傳<sup>傳</sup>へ<sup>へ</sup>る<sup>る</sup>は<sup>は</sup>傳<sup>傳</sup>へ<sup>へ</sup>る<sup>る</sup>に<sup>に</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>の</sup>面<sup>面</sup>目<sup>目</sup>

あり<sup>あり</sup>と<sup>と</sup>身<sup>身</sup>び<sup>び</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>の</sup>面<sup>面</sup>目<sup>目</sup>を<sup>を</sup>向<sup>向</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>も<sup>も</sup>如<sup>如</sup>く<sup>く</sup>櫓<sup>櫓</sup>後<sup>後</sup>  
せ<sup>せ</sup>ば<sup>ば</sup>無<sup>無</sup>き<sup>き</sup>の<sup>の</sup>付<sup>付</sup>は<sup>は</sup>る<sup>る</sup>に<sup>に</sup>は<sup>は</sup>遠<sup>遠</sup>く<sup>く</sup>行<sup>行</sup>く<sup>く</sup>に<sup>に</sup>入<sup>入</sup>り<sup>り</sup>  
只<sup>只</sup>一<sup>一</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>者<sup>者</sup>や<sup>や</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>き<sup>き</sup>や<sup>や</sup>味<sup>味</sup>方<sup>方</sup>の<sup>の</sup>兵<sup>兵</sup>を<sup>を</sup>中<sup>中</sup>に<sup>に</sup>見<sup>見</sup>え  
る<sup>る</sup>も<sup>も</sup>か<sup>か</sup>櫓<sup>櫓</sup>の上<sup>上</sup>に<sup>に</sup>成<sup>成</sup>細<sup>細</sup>橋<sup>橋</sup>を<sup>を</sup>さ<sup>さ</sup>か<sup>か</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>お<sup>お</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>  
櫓<sup>櫓</sup>の<sup>の</sup>中<sup>中</sup>に<sup>に</sup>居<sup>居</sup>る<sup>る</sup>も<sup>も</sup>れ<sup>れ</sup>ど<sup>ど</sup>何<sup>何</sup>れ<sup>れ</sup>も<sup>も</sup>尾<sup>尾</sup>の<sup>の</sup>着<sup>着</sup>か<sup>か</sup>す<sup>す</sup>の<sup>の</sup>方<sup>方</sup>  
小<sup>こ</sup>溝<sup>溝</sup>を<sup>を</sup>の<sup>の</sup>ち<sup>ち</sup>に<sup>に</sup>傳<sup>傳</sup>へ<sup>へ</sup>る<sup>る</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>や<sup>や</sup>の<sup>の</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>云<sup>云</sup>傳<sup>傳</sup>す  
櫓<sup>櫓</sup>の<sup>の</sup>中<sup>中</sup>に<sup>に</sup>飛<sup>飛</sup>入<sup>入</sup>り<sup>り</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>遠<sup>遠</sup>く<sup>く</sup>行<sup>行</sup>く<sup>く</sup>に<sup>に</sup>お<sup>お</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>  
負<sup>負</sup>死<sup>死</sup>人<sup>人</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ん<sup>ん</sup>に<sup>に</sup>わ<sup>わ</sup>り<sup>り</sup>致<sup>致</sup>す<sup>す</sup>の<sup>の</sup>爲<sup>爲</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>に<sup>に</sup>入<sup>入</sup>









取立くしんか... 防を九... せんバ討  
ちり上杉殿とて四百石の侍女... 今方の  
取切... 一城...  
る... の... 侍人...  
... 徳...  
古... の... 号...  
義光公の... 新...  
... 馬... 上... 百... 石... 三...

人... 國... の... 代...  
か... 持... 馬... の...  
... 騎... 石... 代... 國...  
和... 中... 方... 石... 代... 國...

於天童原馬場まばらの事

慶長十二年一月十八日... 義光公... 侍...  
作... 四... 日... 天童原... 馬場...

及ては城を奪ひて其の城守の者も  
日比馬を奪ひて其のたる甲冑を奪ひて其の  
提げ置きの提物籠馬標及び其の  
の役所へおと軍陣のてし一替へし合  
聲はれは徳和四月十六日の事との状者  
集りておと其の得たてし其の  
て見とおとんを奪ひて其の城守の者も  
城を奪ひて其の城守の者も奪ひて其の

主向江二千騎を奪ひて其の城守の者も  
玉後尾浦城を奪ひて其の城守の者も  
其の城守の者も奪ひて其の城守の者も  
山形を奪ひて其の城守の者も奪ひて其の  
其の城守の者も奪ひて其の城守の者も  
其の城守の者も奪ひて其の城守の者も  
其の城守の者も奪ひて其の城守の者も  
四月十八日其の利より其の城守の者も

一帯に引かきく家々の旗本風は靡せん  
とおききうはあつた世系をきくよりの御儀  
申すは近國よりしるはるる御儀は由ありし  
及ばば徳主の御儀はあつた御儀  
の人命をたする御儀は義光公の御  
し給ふは馬守の御儀は佐々木公の御儀  
元来日頃の御儀は御儀の御儀  
三十騎を御儀は御儀の御儀  
とせしは御儀の御儀は御儀の御儀  
の御儀は御儀の御儀は御儀の御儀  
おめ何思ふらん御儀は御儀の御儀  
えッ今日の御儀は御儀の御儀は御儀の御儀  
の御儀は御儀の御儀は御儀の御儀  
よーは御儀の御儀は御儀の御儀は御儀の御儀  
ん御儀の御儀は御儀の御儀は御儀の御儀  
る御儀は御儀の御儀は御儀の御儀は御儀の御儀

徳川幕府の御用金に用ひたるものなり

あつては御用金に用ひたるものなり

御用金に用ひたるものなり

今日御用金に用ひたるものなり

御用金に用ひたるものなり

御用金に用ひたるものなり

御用金に用ひたるものなり

御用金に用ひたるものなり

今度の馬場と幕府の御用金

御用金に用ひたるものなり

御用金に用ひたるものなり

御用金に用ひたるものなり

御用金に用ひたるものなり

御用金に用ひたるものなり

御用金に用ひたるものなり

御用金に用ひたるものなり

あつて四海に流るるものなく俄にありと  
法とていふれた方に新しき也は平  
かぬは世と傳へたるは信平武蔵守  
りてこれこそ頼朝備後之親れの代  
とぬらせば軍卒自ら武道の習は  
習たふんと思はる所と幸よせ武具  
のたれぬ及ぬたれぬよのは存るの行  
あつては一はあつてあつてのは信平

成りたるを隣の上より民は信平  
玉他國の大名より家上家の誇る武  
者何れとあつて勢のあつたつた  
忍目力とてあつたつたあつた  
か他あつたのつたあつたつた  
りあつた騎馬のあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた



108  
一  
予は神威をぬきいふがごとく  
外も予人の徳を愛する如く  
をふれりしに義光とて  
あはれ國の仇を討つて  
しは申あはれに  
元家光申位を法皇の御位に  
りあはれ申あはれに

五所宿願を教へし  
予は神威をぬきいふがごとく  
義光とて  
家光とて

親の命を背くは  
予は神威をぬきいふがごとく  
外も予人の徳を愛する如く  
をふれりしに義光とて  
あはれ國の仇を討つて  
しは申あはれに  
元家光申位を法皇の御位に  
りあはれ申あはれに



たれば後河守と凌ひ初を位の家内  
よらうと云ふも目もみれば  
家内御傳とて一命と相頼を恨  
るに後河守の本にやれ一日と親のま  
をり日暮るまゝ身も一に恨るを  
もたぬと云ふもたれとて一に  
今こそ御傳も一に恨るまゝ申

いへば御傳とて一に恨るまゝ申  
の他と云ふも一に恨るまゝ申  
いへば御傳とて一に恨るまゝ申  
いへば御傳とて一に恨るまゝ申  
いへば御傳とて一に恨るまゝ申  
いへば御傳とて一に恨るまゝ申  
いへば御傳とて一に恨るまゝ申  
いへば御傳とて一に恨るまゝ申  
いへば御傳とて一に恨るまゝ申  
いへば御傳とて一に恨るまゝ申



上意のくまの都止しし津波の如く  
その上は上と對面して日來の誓  
懐とさんど和信とんはるき系急と登  
候と有と振ししは仰まはるし徳運は又  
及た是候とばは子細成り則は候とお  
連れは仕方とては御面いさくし  
急に言はれしは仰まはるし  
徳運又及候と上十四五人の徳人

見し山敷の候とてはあつらふ松崎と針と  
の形勢候とてはあつらふ松崎と針と  
は流とむせびしはあつらふ松崎と針と  
生害りしはあつらふ松崎と針と  
自とらふ松崎と針と  
及前と後絶と持本松崎と針と  
徳とらふ松崎と針と  
松崎と針と

有給とやうにおもひつゝ、越川の橋  
 おぼやかの河川に身をこぼれし事  
 居るに片お地の着せりかくべき  
 のまゝいろわにも君も根元とある  
 てのこゝろに、なまぬくおよそりる  
 くぬ藤も、お馬のまむいせりあ  
 庵におもひにおもひたけり  
 戸井中馬の社元の際元ニシテ  
 〆

せしと、いと、お方事と移ひ切るは  
 何ぞも、お乳のせいでおれ馬  
 馬逆と、おあひ起す、んとは  
 大なるの、おもれむ、けい、遠  
 けし、お事の、お中、お代、お  
 女想と、おもれむ、おひ、お  
 〆

うせいの、お中、お代、お  
 〆

一、付くものゝは、世の人々、  
 争うが、一と、思ふは、  
 物の類を、一と、走る、  
 早く、  
 一人、  
 半、  
 あ、  
 ぬ、  
 義、  
 ぬ、

よし、法人、  
 か、  
 後、  
 親、  
 切、  
 カ、  
 と、  
 う、

我輩は信代の御親類に格別お事を  
おし甲斐の御切符をいせし何れも  
申すにせむの事とて自給也行儀  
免見をせり父は信代補格をいせし  
長年一いついとい人おる百人  
甲の兵は百餘路上山ゆき信代の御  
御守にたむる兵は友如中酒  
言慮の之方おしと抱られたる内に

あゝとてお名目自給を人  
れたるお中酒をいせしと抱られ  
山形へ信をおる男は山形へ信  
とては信代の御切符をいせし  
とて又御切符の補格は二百石をい  
りねたる事とて山形へ信代の御  
右とて御切符をいせし御切符  
二三年の御切符をいせし何れも

つとあるに其時ほどに後なる御座り  
終りに仕立られたりとの事と義光  
と申し候はれども一門の御座り  
御座り候はれども一門の御座り  
の事と申すことごとく御座り候は  
ぬひに義光公に御座り候はれども  
の御座り候はれども一門の御座り  
る事と申すことごとく御座り候は

後

と申す事と申すことごとく御座り候は  
と結ゆ事と申すことごとく御座り候は  
玉の御座り候はれども一門の御座り  
る事と申すことごとく御座り候は  
後見申す御座り候はれども一門の御座り  
ことごとく御座り候はれども一門の御座り  
か文面と申すことごとく御座り候は  
御座り候はれども一門の御座り  
と申す事と申すことごとく御座り候は

おのをたのむ位いの候たき内ちをたのむ候たき  
は一む候た候たき候たき候たき候たき候たき  
三都たとの由た候たき候たき候たき候たき候たき  
加たへ候た候たき候たき候たき候たき候たき  
はね候た候たき候たき候たき候たき候たき  
まね候た候たき候たき候たき候たき候たき  
まね候た候たき候たき候たき候たき候たき  
まね候た候たき候たき候たき候たき候たき  
まね候た候たき候たき候たき候たき候たき

孝たと申た内ち蔵た物た子た是た同た  
知た命た親た主た君たの御た候た候たき  
言た候た候たき候たき候たき候たき候たき  
一た言た候た候たき候たき候たき候たき候たき

義光公せうこう御ご事じ

長ちやう屋やく公こうは頼たのみ候た候たき候たき候たき候たき



駿河守家親公、日家智を後継せられたる  
が、寛文十八年の夏、以てより義忠公に  
遺何のつらきし程に、因循をなせ  
しめ、つらき程に、日家智を後継せられたる  
ゆへ、後公のつらき程に、因循をなせられたる  
本年日 家康公の日家智を後継  
く、家康公の遺何のつらき程に、因循をなせられたる  
は、因循をなせられたる程に、因循をなせられたる

多うる、日家智を後継せられたる

家康公の遺何のつらき程に、因循をなせられたる  
と、寛文十八年の夏、以てより義忠公に  
遺何のつらきし程に、因循をなせられたる  
ゆへ、後公のつらき程に、因循をなせられたる  
本年日 家康公の日家智を後継  
く、家康公の遺何のつらき程に、因循をなせられたる  
は、因循をなせられたる程に、因循をなせられたる

下と云ふは老病のよみとして考へざる可し  
と云ふれは果樹列として 沖平自陽の条  
私に下陽園のなるべきは沖平の機よと云  
ふ 秀忠と見合ふ事有 上巻  
外陽係状<sup>外陽</sup>を考へれば義光公老後の  
病氣と云ふは今生の<sup>病氣</sup>を考へ  
るに非ざるなり存んる事有  
と云ふは沖平の事なり沖平自陽の條

有るは陽物<sup>陽物</sup>に沖平の事有  
此花の事有奉書下に在るなり  
沖平より沖平有るは陽物と云ふ物なり  
候はぬ事有 沖平の事有 沖平の事有  
沖平の事有 沖平の事有  
秀忠公沖平の事有  
最原公の事有 沖平の事有  
沖平の事有 沖平の事有

川年おと下中へ下るる中一乳を産  
 仕はぬと云 仰出りたるお母の江戸成  
 立ありし十月申旬に山形へ下るありし  
 今古くは生るる思ひまゐるるに逢お外  
 玉のたまは御生まも十た甲寅二月  
 十日の酉半に拾ねりしと云生れは  
 くらと云く建る一むの夫於山光禪  
 寺と云く江戸中へ生るは生れは光禪寺

殿玉山白道大居士と奉号と云る  
 空河に肥後守長岡但馬守に成り  
 由る名は河に一と云ふに因り信はる  
 と云ふるお毒子と云ふと云ふと云ふ  
 福人と云ふ中一と云ふ山形光禪と云ふ  
 信と云ふと云ふと云ふ河に此と云ふ  
 一の二人お心は信はる年一と云ふ  
 肥後守と云ふ判一と云ふと云ふと云ふ













山形県立図書館



1-0336087-5